

うちなー健康歳時記

県医師会編

<595>

街で鼻に細い管(カニエラ)をつけて、手押し車(カート)や肩から担ぐバッグにポンペを乗せ酸素を吸入している人を見かけることがあると思います。病院を退院後、「在宅酸素療法」によって自宅で酸素吸入を



名嘉村 博(名嘉村クリニック)

続けている方たちです。在宅酸素療法は、呼吸器の病気で非常に大切な治療のひとつです。医療関係者の間では英語の Home Oxygen Therapy (ホーム・オキシゲン・セラピー)の頭文字をとってホット(HO

在宅酸素療法

ト)と呼ばれています。この治療を受けている疾患で一番多いのが、主にタバコが原因で起る肺気腫や慢性気管支炎で、この二つはまとめて「慢性閉塞性肺疾患」と呼ばれています。この疾患では一日の酸素吸入時間が長いほど長生きしていることが証明されており、療法が開始されたらできるだけ長く吸入することが望まれます。次に多いのが結核後遺症です。そのほか間質性肺炎(肺線維症とも呼ばれます)、肺がんなどでも短期間実施されることもあります。さらに、これまでは呼吸疾患だけを対象としていましたが、今年四月からは心臓の病気で条件を満たせば保険が適応されるようになります。

国内初導入は沖縄

酸素療法は以前は病院でしかできない療法でした。しかし、一九八〇年代の初めごろ、アメリカやイギリスで肺気腫などの慢性呼吸器疾患によって息切れが強く酸素欠乏状態(低酸素血症)となった患者さんに連続的に酸素を吸入させたところ、日常生活の行動範囲が改善し、さらに生存率も高まることになりました。時にごの重要性に注目し、医療保険や種々の制度上の困難を乗り越えて国内初の導入にこぎつけたのです。その意味で、在宅酸素療法は日本では沖縄発の医療のひとつとも言え、私も県出身の医師として、また県民の一人として誇りに思っています。さて、同療法は、一九八



六年以降、国内でも健康保険が適応され、以前に比べて開始しやすくなりました。同療法が日本で最初に開始されたのは、この沖縄の地です。県立中部病院の前院長で、現在、群星(むりぶし)沖縄臨床研修センター長の宮城征四郎先生が米留

主に呼吸器疾患に適用

の吸入量は病気の重症度、歩行や実生活の中での活動量などによって変更されます。このために必要に応じて、指先の酸素飽和度や動脈血の酸素や炭酸ガス(二酸化炭素)を測定します。酸素吸入法としては前述した鼻カニエラがもっともよく使われます。酸素の流量が多い場合にはマスクが必要なくともあります。酸素の供給源としてはポンペ、液体酸素、空気から酸素をつくる酸素濃縮器があり、どれを使用するかは機器の長所と短所を考慮しながら病状と利用者の意向によって決定します。できればこの治療法の話にならないことが望ましく、そのためにはまず禁煙が予防の第一歩です。しかし、この治療が必要となった場合でも自宅にこもり、酸素を活用して生活の質を上げ、うまくホットに生きようと努力することが大切です。

